

ケロリン日記

古城美夜

(昨年の夏も暑かったなあ)と、ふと思い出した。それは、寒い冬のさなかに、春一番を思わせる生暖かい風が吹き荒れた日のことであった。

暑苦しかった昨年の夏のある日、私達夫婦がつましく住んでいるアパートの玄関先に、蝦蟇蛙(がまがえる)が佇んでいるのを見付けた。

私が、「おっー」と思わず男性のように叫んでしまったのは、その蛙には見覚えがあったからである。なにを隠そう、生き物には須く優しい夫が、見掛ける度に、「ケロリン」と、優しく声を掛けては、かわいがっていた蝦蟇蛙であった。

それにしても、ケロリンとは、我が夫にしては、なんとも工夫のない命名ではあるが、まあ善しとしよう。

私は夫に倣って、「どうしたの、大ちゃんは仕事に出てまだ帰っていないけど」と優しくケロリンに声をかけた。勿論、大ちゃんとは我が夫のことだ。

徐に、夫がしてやっていたように行水代わりに水を掛けてやろうと思いついた私は、そくさく噴霧器を取りに家に入り、再び玄関先に戻ると、ケロリンはまだそこにいた。

私が噴霧器で、暑さを凌ぐシャワーのごとくに水を掛けてやると、ケロリンは大人しく全身にその水を浴びていた。惜むらくは、夫のときほど気持ち良さそうにはしていないかったことである。あらま、私は一体なにを嫉妬しているのだろう。

私がケロリンに、「大ちゃんが仕事から帰るまでここで待っていられる?」と聞くと、「うん」とケロリンが答えたような気がした。「返事は『はい』でしょう」と教訓したい気もしたが、説教臭いのは私も苦手なので、止めにしておいた。

一息ついて私は、夫に電話を掛け、「ケロリンが待っているわよ」と伝えた。幸いに、夫は自由業なので、その辺りはわりと自由に出来るのだ。夫は流石に驚いた様子であったが、「まだ少しかかるな」と言った。

私は、待ち人ならぬ「待ち蛙」のことがどうにも気になって、冷房の利いた部屋から暑苦しい玄関先まで何度か顔を出しては、「ケロリンまだいるんだ。暑くないの」なんて話しかけていた。勿論、しゃがみ込んで。保護色のため、なかなかそこに居るとは気付にくい相手だけに、地面に向かってぶつぶつ言っているのしか見えなかったであろう私は、傍からは、(なんだか妙なやつがいるぞ)と思われていたに違いない。

だが、はつきり言って置きたい。蝦蟇蛙は、否、少なくともケロリンには、人間の言葉がわかるのだと。

それから約三時間が経過して、夫が帰宅したとき、ケロリンは約束通り、まだそこで待っていた。些か呆れて見ている私に、夫は、「ぼくはケロリンにはもてるからねえ」と自慢気に言っただけだが、まあ、三時間もじっと待っているのを見せられたのだから、そういうことにしておこうと、そこは一步引いて「あーそ」と答えた。それにしても、夫はいつの間に、ケロリンをあれほど懐かせたのであろうか。全く以って謎である。

噴霧器担当が夫に代わり改めてシャワーを浴び直したケロリンは、今度こそ十分に満足した様子で、棲み家へと帰っていった。

驚いたことに、ケロリンは、それから一週間、一日も休まずに、日が暮れて、宵の口ともなると、玄関先に現れた。

ほかならぬ私も次第に、ケロリンに、大いに愛着が湧いて来て、我が家の玄関先に日参する不思議なその子に、「野良猫に捕まらないように気を付けてね」などと優しく訓示を垂れたりするようになった。

ところが、ちょうど一週間が経過して急に、ケロリンが現れなくなった。私達は、当初は旅行にでも出掛けたんだろうなどと気楽に構えていたのだが、余りに姿を見せない日が続くと、段々心配になってきた。そして、やがて悲しい知らせを受けとることとなる。ご近所の奥様から、件の蝦蟇蛙が野良猫に啣えられているのを見たこと知らされたのである。

私達は、愛しい我が子を亡くしたように落ち込んでしまった。実は、私達に子供はいない。そして思えば、件の野良猫も、見掛ける度に、夫が「三毛、三毛」と声を掛けてはそれなりにかわいがっていた半野良猫だったのだ。それが、なんとも切ない。

それから何日かが過ぎて、今度はやや小柄な蝦蟇蛙が、同じように玄関先に現れた。これにはまたもや驚かされた。だが、ケロリンが蘇ったわけではなかった。身体の大きさや、皮膚に描かれた模様の違いにより、かのケロリンとはハッキリ区別が出来たのである。

この新顔の蝦蟇蛙は、たしか、角を曲がって数軒先の敷地に、まだ地表に土が残った所で数回見掛けたことのある子だった。(わざわざ遠征して来たのね)と思うと、いとおしい気持ちがあった。いたずら好きの夫は、「ケロ^ッ二だな」と早速、名前を付けた。「ケロリン二号」では済まされなかった辺りに、多少とも工夫の跡の見られる命名であったと言って置こう。この小柄なケロ二は夫の掌に乗ってまで水浴びをして、帰っていった。

二回目に訪れたときは、偶々暑さ凌ぎに玄関扉を開けておいたのだが、なんと三和土^{たたく}にある靴の中に入り込んで夫を待っていたのには流石に驚いた。

あのケロリンがいなくなって暫くしてのことだけに、なんだか因縁めいた気がした。ま

さかとは思うが、自分もこの世から去る運命なのだと、お別れを告げに来たのではないかと感じたからだ。あれから、ケロ二にも会ってはいない。

このように不思議な経験をすることになった夏も、あつという間に過ぎ去り、秋らしい秋が訪れることもなく、いきなり真冬に突入した。

今年の春も、また昨秋のようにあつという間に過ぎ去って、猛暑の夏が訪れるのであるうか。

再び、夏が訪れて暫くした頃、玄関先にひょっこりと、「水浴びに来たよ」と言わんばかりに、かわいらしい蝦蟇蛙が現れないかと思うのだ。